

### 兵庫県神戸市

「人と防災未来センター」  
「震災後の区画整理事業  
によるまちづくり」につ  
いて



▲新長田駅北地区の様子

#### ○神戸市の概要

瀬戸内海に面している神戸市は、古くから貿易港として「みなと」とともに発展を遂げてきました。

明治22（1889）年に市制を施行し、その後、数回におよぶ周辺市町村との合併によって、昭和16（1941）年には100万人の人口を擁する都市へと発展して現在に至っています。

#### ○人と防災未来センター

この施設は、「防災未来館」と「ひと未来館」のふたつの建物からなっています。展示、人材の育成、調査研究、交流ネットワークなど多くの機能を要する施設です。

「防災未来館」の1、17シアターでは、大パノラマ映像、音響や床の振動で震災の15秒間を再現しており、その他の展示物等も被災地であればこそ実現した深みのある内容でした。

また、「ひと未来館」は、いのちの尊さと共に生きることの素晴らしさを体感できる施設でした。

#### ○神戸市の区画整理事業の目的

まずは、市役所を訪問し、区画整理に関する説明を受け、その後、震災被害の最も大きかった地域のひとつである長田区を訪問しました。

正式には「震災復興土地地区画整理事業」といい、その目的は、「昔からの古い木造住宅が

密集した地域で」「特に被害が大きかった地域を中心に」「防災性に優れた、安全・安心で」「なおかつ快適なまちづくりを目指す」ことにあります。

#### ○終わりに

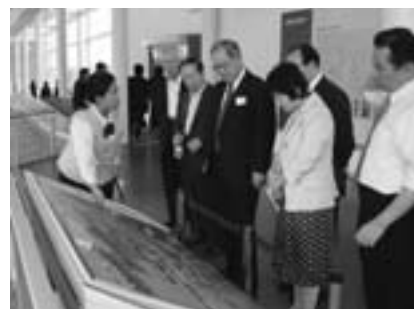
阪神淡路大震災から、今年の1月17日で11年が経過しましたが、神戸市における「震災復興土地地区画整理事業」は、未曾有の被害をもたらしたところからの出発でした。

早急な復興が望まれる中で、住民の意見を取り入れながら、事業を進めていくことへの挑戦をされていきました。その力ギとなったものは、住民との真剣で誠実な対話を重ねることでした。

状況が異なることから、羽村市の区画整理と単純に比較することはできませんが、力ギとなっている部分は共通するところがあるのではないかと思います。

### 兵庫県淡路市

野島断層と大震災を伝える構築物等について  
(北淡震災記念公園)



▲震災記念公園での説明

#### ○淡路市の概要

淡路島の北部から中部に位置する淡路市は、平成17年4月1日、淡路、北淡、東浦、津名、一宮の5町の合併により誕生しました。総面積は184・05平方キロメートルで、淡路島全体の約3割を占めます。

#### ○北淡震災記念公園の概要等

ここは、公園全体が旧北淡町の震災について学べる施設で、地上に露出した断層を保

存・展示するほか、断層上に立つ民家もそのまま残し、さらに体験館も併設してあり、歴史的遺産としての記録とともに観光資源としても活用されています。

ちなみに、1日約1000人〜2000人、年間約36万人の方が訪れるそうです。特に修学旅行生が多いようでした。

大震災によって、その地域が受ける経済的被害と損失はたいへん大きなものとなることは言うまでもありませんが、どんなものでも工夫したいで立派な観光資源となること、そして、それによって地域が潤うのだと感じました。

#### ○震災からの教訓

- ① 災害対策は、自助、共助、公助の連携した対応が必要。
- ② 自分だけは大丈夫と思わず、災害に対する想像力を持つ。
- ③ 過去の災害の教訓を後世継承し、生かすことが大切。
- ④ 災害情報を正しく、早く、適切に伝えることで被害が軽減する。

○終わりに

日本では、いつ、どこで地震が起きても不思議ではありません。

先の阪神淡路大震災では、6千433人の命が失われ、その10倍の人が負傷し、100倍の人が被災をされ、10兆円もの被害を出しました。

地震は私達の生命・財産を奪うだけでなく、地域経済にも壊滅的な打撃を与えます。

旧北淡町では、その悲劇の材料を観光資源として活用し、地域を潤していました。羽村市の減災のまちづくり、震災の教訓が生かされることを望んでいます。

経済委員会行政視察メンバー

- 委員長 市川英子
- 副委員長 中根康雄
- 委員 石居尚郎
- 委員 水野義裕
- 委員 佐藤征一
- 委員 染谷洋児



厚生委員会

大分県武蔵町

知的障害者通所授産施設「秀溪園」について



▲秀溪園にて

障害をもった方が安心して生活できるよう、みんなで支えあう地域社会の形成が求められています。「通所授産施設」とは、障害者の方が通いで仕事をする施設のことです。障害者の自立にとって極めて重要な役割を果たしています。羽村市内の通所授産施設では、主に工業部品を作っていますが、今回視察した秀溪園では、授産事業に農業を採り

入れるというユニークな試みを実践していました。

○秀溪園の生い立ち

秀溪園は、教育者だった現理事長・古城晋氏の配偶者・規子氏が約29年前に、当時、障害者授産の受け皿が不十分だったことから、個人の土地や資金を注ぎ込んで開設したのが始まりです。その後、次第に規模を拡大していき、昭和56年には社会福祉法人となりました。現在は30人の園生と14人の職員がいますが、行政に頼りきりでない自主独立の精神は、いまでも運営の随所に感じられました。

○特産の小ねぎに着目

秀溪園も開設して数年は、ハンカチや素焼きの民芸品などを作っていましたが非常に経営が苦しく、園生に工賃を支払うまでにはいたらなかったそうです。そこで着目したのが、秀溪園のある武蔵町特産の小ねぎです。武蔵町は国東半島にあ

る、気候風土に恵まれた純農村地帯です。大分県が進める「一村一品運動」では町を挙げて小ねぎの栽培に取り組み、今では「武蔵ねぎ」として全国的に高い評価を得ています。

小ねぎは丈夫で扱いやすく、年に数回収穫できることから、秀溪園での栽培は順調に軌道に乗り、いまでは米や他の野菜も栽培し、事業収入から経費を差し引いても園生一人あたり月額で1万5000〜6000円の工賃を支払えるまでに なったそうです。

○「授産種目で将来が決まる」

「授産種目を何にするかでの施設の将来が決まる」と強調されています。

秀溪園は農業を選択しましたが、園生たちが土とふれあいて、いきいきと作業している様子が伝わってきました。また、高齢化で人手が回らなくなった周囲の田畑を借り受け活用することで、地域とのふれあいも始まっています。羽

村市にとつても、いろいろと参考になる視察でした。

### 大分県豊後高田市

#### エコマネーによる環境対策について



▲豊後高田市

豊後高田市は、国東半島の西側にある自然豊かな市で、人口は約2万6000人です。市の中心商店街では、古い建物を保存したり昔の街並みを再現し、懐かしい「昭和のまち」としてまちおこしを図っています、多くの観光客で賑わっています。

○エコマネー導入の経緯  
エコマネーとは、現金では

表しにくい環境、福祉、コミュニティ、文化などの価値を共通の基準で表し、循環させる地域通貨のことで、人から人へと流通する過程で善意の輪が広がり、地域の活性化が図れるというものです。

大分県では「ごみゼロおおいた作戦」を展開していますが、その一環としてモデル地域でエコマネーを活用し、資源リサイクルとごみ減量を図ることにしました。そこで豊後高田市では平成16年度、県の補助事業として「昭和のまち」にエコマネーを導入し、一層の振興を図っていくこととなりました。

#### ○事業の概要

平成16年度は、「昭和のまち」での買物に使うチケットを購入したときのほか、公共施設の清掃やマイバッグ利用、また古着や牛乳パック、古新聞等の提供に対してエコマネーを発券し、「昭和のまち」の協賛店で現金や地域通貨券と併用して使ったり、エコ商

品の購入やエコ商品が当たるとくじ引きに使ってもらったということでした。

こうした取り組みは商工会議所が主体となつて行われ、環境だけでなく商業振興という面もかなりあったようです。

平成17年度は、市単独で実施しました。「昭和のまち」との関連も直接はなくなり、発券は、清掃などのボランティア活動やリサイクルへの協力に対して行われ、使用方法も主にエコ商品との交換などになりました。

#### ○エコマネー導入の効果

エコマネーによって、資源リサイクルやごみ減量の効果を数値で表すのは難しい面があります。しかし、以前に比べ、市民の間に環境意識が浸透し、また市の職員が河川の清掃活動を開始するなど、波及効果が随所に見られるという点は、羽村市にとつても参考になることと思われました。

### 佐賀県鹿島市

#### NPO法人「余暇センターきたじま」について



▲余暇センターきたじま

に他の福祉サービスマにも事業を拡大していき、現在は、独自事業としてのデイサービス、ホームヘルプサービス、給食、各種余暇活動教室等のほか、鹿島市からの委託事業のデイサービスやグループリビング等、また介護保険制度による訪問支援サービスも行っています。中でも、高齢者の方を夜間お預かりする「夜間デイサービス」は、他にあまり例のない取り組みです。

#### ○施設運営の特色

鹿島市は佐賀県南部、有明海に面した人口約3万3千人の市です。今回訪問した「余暇センターきたじま」は、かつての城下町の面影を残す市の中心近くにある福祉施設です。北島勝郎理事長の配偶者・富子さんが痴呆の義母の介護を始めたのをきっかけに、「どうせやるなら、大規模施設とは一味違った家庭的な雰囲気施設を、自ら作ろう」ということで、平成8年に私財を提供して設立されました。その後、認知症予防を中心

○NPO法人化

いま、新しい公共の担い手として、役所でも営利企業でもないNPO（民間非営利活動法人）などが注目されています。余暇センターきたじまは、当初は無償ボランティアによる任意団体でしたが、鹿島市の事業委託や介護保険サービスの受け皿として対応できるよう、平成11年にNPO法人格を取得しました。これにより、活動の輪が広がり、社会的にも認められてきたそうです。今後は、経営面でも安定化が図ればとのことでした。

○視察を終えて

平成18年度から第3期の介護保険事業計画がスタートします。余暇センターきたじまの、小規模・NPO法人というあり方を活かした事業展開は、高齢者の方に、住みなれたまちでいつまでも元気で暮らしていただくための示唆に富んでおり、羽村市にとっても大変参考となるものでした。

厚生委員会行政視察メンバー

- 委員長 船木良教
- 副委員長 濱中俊男
- 委員 瀧島愛夫
- 委員 菱田樞樹
- 委員 桑原 寿
- 委員 高橋美枝子

第二次議会改革に着手

市議会では、「一般質問における一問一答方式の導入」「議員定数の見直し」「議会用語の見直し」など、議会の活性化とより開かれた議会運営を目指して、議会改革に取り組んでいます。

昨年12月には、第二次の「議会改革検討委員会」を設置し、次なる改革に着手しました。今後とも、さまざまな改革に努めていきます。

議会改革検討委員会

- 委員長 川崎明夫
- 副委員長 露木諒一
- 委員 船木良教、中根康雄、濱中俊男、石居尚郎、高橋美枝子、馳平耕三



並木正志議員逝去

—心からご冥福をお祈り申し上げます—

当市議会議員の並木正志氏（58歳）は、ご病気のため、平成17年12月10日にご逝去されました。葬儀は12月14日、そうしんホール青梅において、しめやかに執り行われました。

故並木議員は、平成7年に市議会議員に初当選し、以来、厚生委員会副委員長、羽村市生涯学習施設建設特別委員会副委員長、羽村市監査委員、議会運営委員会委員長などを歴任され、羽村市の発展のためにご尽力されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

◇1年の締めくくりの12月議会。活発な議論が続きました。この1年間で、214人の皆さまに本会議を傍聴していただきました。ご多忙の中、お越しいただいた皆さまに心から感謝申し上げます。

◇第二次議会改革も始まりました。議会、だよりのアンケートも視察報告会の中で実施し、改善すべき点も見つかりました。今年も、もっと多くの皆さまに、議会を傍聴し、議会だよりを読んでいただけよう改革に取り組んでいきます。◇同僚の先輩議員の並木正志議員が逝去されました。私たち若い議員にもさまざまなご指導をいただきました。若すぎる死が残念でなりません。心からご冥福をお祈り申し上げます。

《編集委員》

- 中原雅之 石居尚郎
- 馳平耕三 濱中俊男
- 佐藤征一

（馳平記）